

聞名仏教

第82号
(発行日)
2017年7月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

称えつつ聞く聞法

真宗大谷派関係から発行している小さな雑誌が送られてきました。その中で一つの記事に目が止まりました。それはFさんの文章で、

「雨風激しい春の嵐のよるに、友は川に身を投げてしまった。発見された遺体は寒かったせいかむくみもなく、美しい顔だった」

という悲しみのただよう印象深い書き出しでした。

川に身を投げたAさん(女性)は、他者への不安や恐れ(性)の深かった人で、そうした自分をなんとかしたいというところで、真宗の教えを聞くようになられたそうです。そして十六年間も真宗の聞法を続けてきた中で上に述べたような結末になったのです。

これと同じような話、いわば長年真宗の教えを聞きながら、ついに自死に至ってしまったという、そういう胸の詰まるような話は今までも他に聞いたことが二・三あります。自死に至るまでにはいろいろな事情があり、軽々に判断

すべきものではないと思いますが。

Aさんは

「安心して生き、安心して死んでいける世界はあるのでしょうか。その世界に至る道はどのような道なのでしょうか」と問い続けた方だったとのことです。この問いをたえず持ちながら聞法してきたAさんの姿勢は真宗の聞法者として間違っただけではなく、むしろ大変純粹でまっとうな姿勢だったと思います。

ただ問題は、真宗を聞く姿勢はまっとうでもどのような聞法生活を送られてきたのか、が気になりました。そのことについてはこの短い文章にはほとんど書かれていませんでした。

どういう点で、気になったかと申しますと、Aさんが聞法を熱心に重ねながらも、お念仏を申しながらの聞法であったのかという点です。真宗は単に教えを聞いて学ぶというだけの生き方ではないはず

です。行が与えられています。

称名念仏の行です。

行のない仏教はありません。禅宗は坐禅の行があります。ですから禅の本やお話を聞くだけで禅の覚りが開けるかという、これはおぼつかないでしょう。テラバータの仏教(南方の仏教)でもビーパッサナなどの行があり、それを実践しなければ教えが身につかないようです。これらは勿論、浄土の仏教ではなく聖道門の仏教ですから、行は行でもその人個人の修行としての行ですが。

浄土門の仏教である真宗も仏の行があります。親鸞聖人のおすすすめ下さる行は阿弥陀如来様から頂いて称えるお念仏の行です。ですから聖道門の行とは行としての性格は違いますが、しかし「おこない」であることには変わりはありません。

《盂蘭盆会法要》

八月十日(木)

午後二時始まり

*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。

ません。

親鸞聖人は『浄土文類聚鈔』の初めに

「万行円備の嘉号は障りを消し疑いを除く。末代の教行、専らこれを修すべし。濁世の目足、必ずこれを勤むべし」と述べられ、(専らこれを修すべし)とお念仏をお勧めになっています。

Aさんは果たしてお念仏を称えながら聞法されたのかどうか、私は気になります。かといって、お念仏をしながら聞法していけば、自死は決してしないとも勿論言えませんが。しかし自死には至らなくてすむということは十分あり得ると思うのです。

といいますのは、私が若い頃、藤原正遠師という尊い真宗の先生にお会いしました。先生がよくおっしゃった言葉に「阿弥陀仏はへどうにもなら

宝林宝樹微妙音

(和讃問答)

智慧の明を開かせる。この清

浄楽である仏をたのめ。(岩波

文庫「親鸞和讃集」参照)

△ △ △ △

D「このご和讃も如来・浄土

のお徳を讃えられた和讃です」

N「なぜ如来浄土の有難い功

徳をなんども説かれるのです

か」

D「それは阿弥陀仏のお徳に

帰入せしめたいと思し召して、

釈尊は詳しく如来浄土のよき

はたらきをお説きになったの

だとうかがいます。これに関

してですが、若い頃、昭和四

十年頃、先輩からインドの話

を聞きました。その頃、イン

ドがどういふ国なのか、まだ

たいして紹介されていない頃

です。ですので、インドに行

った人は珍しかったのです。

そういう時分にインドに行っ

て、アチコチを旅をして帰っ

て来た尊敬する先輩が(イン

ドはすごいところだったよ。

よかったよ。エローラのカイ

ラーサ寺院に行ったときには、

もうここで死んでもいいとま

で感動した。君も行ってみた

の信心は幽邃である」と名師
であられた西元宗助先生をし
て言わしめるほどの尊い信心
にまで熟されました。極重悪
人とは自分で自分をどうする
こともできない、苦惱一杯の
人のことです。

こうした実際の行いとして
のお念仏がなければ、真宗教
義や真宗の深い道理をたくさ
ん聞いても——それで真実信
心に至る人は勿論ありませんよ
うが——「分からない」「どう
にもならない」「どうしていい
かわからない」という壁にぶ
つかって絶望の淵に立たされ
てしまうということがあると
思います。このことは、その
時逆に救いを見出すか、ある
いはそうならず終わるか、
という大事な別れ目になる可
能性があります。Aさんは非
常に熱心に「安心して生き、
安心して死んでいける世界は
あるのでしょうか。その世界
に至る道はどのような道なの
でしょうか」と問い続けなが
ら聞法されたと思います。そ
れは大変尊いことだと思いま
すが、ただナムアミダブツと
いう単純な行が伴っていたか
どうか。それが気になりました
。なので一文を草した次第です。

(了)

正遠師はそれによって多くの
人をお念仏の道に導かれまし
た。

こういうお念仏がすぐ真宗
の信心だといえませんが、
こうしたお念仏を通して阿弥
陀仏の「我が名を称えよ」と
いう大悲が自然にその人の心
に浸透してくるように私には
感ぜられるのです。聖人が

「定散自力の称名は
果遂のちかいに帰してこそ
おしえざれども自然に
真如の門に転入する」
と詠われたご和讃(浄土和讃)
にはこのお心がこもっている
のではないかと思うのです。

木村無相さんが真言宗の修
行に行き詰まってもう真宗し
かないとなつて東本願寺に勤
め、真宗一本の生活に入られ
たころの詩に
「道がある
道がある
道がある
たった一つの道がある
ただ念佛の道がある
極重悪人唯称仏」
というのがあります。木村さ
んは極重悪人唯称仏(極重の
悪人なる汝よ、ただ仏名を称
えよ)という阿弥陀仏の仰せ
の道に入ることによって、阿
弥陀仏の大慈大悲に導かれ、
最晩年には(無相さんの念佛

ねば我が名を称えよ」とおつ
しゃっている。だから困った
らお念仏しなさい」と人にも
よく仰せられていました。こ
ういうお念仏は信心がともな
った真宗念仏そのものとはい
えないとしても、苦悩し、い
きづまり、不安を抱えている
人にとつて、そのつどの光と
なるものです。

お念仏はだれでもいつでも
どこでもできる行いです。今
苦しいまま、不安なまま、分
からないまま、どうにもなつ
ていない今のまま、(ナムアミ
ダブツ)と称えることはでき
るのです。称えてみれば、不
思議にほつと一息つけるので
す。これは何でもないようで
すが、私は大事なことだと思
います。藤原正遠師の有名な
歌に
「いづれにも
ゆくべき道の
たえたれば
口割りたもう
ナムアミダブツ」
というのがあります。どうに
もならない、何も分らない、
そこに「どうにもならねば我
が名を称えよ」との思し召し
のままナムアミダブツと称え
る。そこに、どうにもならな
いまま、今、今と生きれると
いつていい道がつくのです。

たえれば

たえれば

たえれば

まえ」と何度も言うし、私自身インドの思想に親しんでいたので、是非行ってみたい思い、それから三年ほどして貯金を下ろしてインドを四十日間旅しました。そして非常に感動して帰国した経験があります」

N「そのことと浄土についての説法とどういう関係がありますか」

D「そのように、お釈迦様がお浄土というのにはすばらしく有難いところだと、詳しくなれども説かれるのを聞いて、それじゃあ私も生まれさせて頂きたいという心が起こり、本願を信じ念仏申すようになるのでしよう。お浄土のお徳が非常に優れていることが一つも説かれなかったら、凡夫である私は阿弥陀仏に救われてお浄土に生まれさせて頂くという願いはなかなか起こらなかつたと思います。それゆえ釈尊はお浄土の真実の功德をさまざまにお説きになり、浄土に生まれたいという心を私たちに起こさせ阿弥陀仏に信順させて下さるのです」

N「このご和讃にはことに浄土の音の徳が宝樹とか宝林とかのシンボルを通してたたえられていきますね。では浄土の

宝の樹木から出る微妙音というのはどういう音声なのでしょうか」

D「浄土は真実の領域ですが、その真実が働く様の一つに音声（名声）として働くといわれています。微妙音と表現されています」

N「微妙音とは」

D「この言葉に聖人は、（動くもの皆、法の声ならざるはなし」と左訓をされています。浄土の宝の木が風にゆれて出す音、浄土の宝の池の水の流れる音と象徴的に形容されるものの発する音は、みな法（真実）の音声でないものはない。法（真実）は音声となって響いて、衆生を教化されるということでありましょう」

N「そういうのはたらきは浄土の中だけではたらきですか」

D「いいえ、当然浄土のはたらきは穢土である私たちの世界へのはたらきとなって下さっています」

N「それはお聖教にどう説かれていますか」

D「たとえば大経では正覚の大音、響き十方に流るとあります。また天親菩薩の『浄土論』には如来の微妙の声、梵の響き

十方に聞ゆ。

曇鸞大師の『浄土論註』には阿弥陀如来の至徳の名号説法の音声を聞けば、上のごとき種々の口業の繫縛、みな解脱を得。

とまで仰せになります。如来浄土の音声は名号となって十方世界に響き、私たち衆生に聞かせて、解脱（覚り）に導いて下さるのであります。」

N「名号となってまで私たち救おうとなさるのですね」

D「ええ、その名号が南無阿弥陀仏です。ですから南無阿弥陀仏はお浄土（如来）のはたらきとしての音声であり、お言葉です。称える口から出て下さる南無阿弥陀仏は救済意志を表された言葉です。阿弥陀仏の言葉によって私たちを救おうとされるのです」

N「阿弥陀仏の本願のお心はどういう内容ですか」

D「我が名を称えよ」という内容です。これについては何度も申ししていますので、詳しくは申しませんが、（汝をタスケルで念仏申せ）の思し召しです」

N「（助ける、引き受ける）との阿弥陀如来様の救いのお言葉ですね。それが口に出て下さる南無阿弥陀仏の音声なの

ですね」

D「ええ、阿弥陀仏の喚び声ともいわれます。天親菩薩の『浄土論』の

梵声の悟り深遠にして微妙なり、十方に聞こゆ

について、曇鸞大師は

国土の名字、仏事をなす。

いづくんぞ思議すべきやと仰せられています。国土の名字とは如来浄土の名すなわち南無阿弥陀仏の名号でしょう。それは仏事いわゆる衆生を救う、そういうおはたらきをしてお下さる。なんとまあ不思議なことよ、とたたえておいでです」

N「伎楽とは」

D「伎楽は音楽ですね。浄土は音楽の世界とも先人はおっしゃっています。その音楽は清らかでハーモニーは美しく、しかも哀れで優美でさえわたつていて、聞く者に哀れみ（大悲心）をおこさしめたまう音声であり、正しい智慧を起こさせて下さる音声だと、先達は申されています」

N「そういう様に浄土のはたらきは音声で表現されますが、ではこの世（娑婆）はどんな音声で響きわたっているのでしょうか」

D「それについては、善導大

師が

いたるところに余の樂なし、ただ愁歎の声を聞く。

とおっしゃっています。この言葉は、身にしみて本當にそうだなと思えます。要するにこの世界はどこに行っても、憂いや嘆きの声を聞かぬところはないという。物足りないという声、言うことをきいてくれぬという声、儲からんと云う声、あそこが痛いところが辛い声、寂しい、うつとうしいなどの声、勝った負けたなどの声、言い争う声、を日常的に聴いています。平和で美しく深遠な声や音は殆ど聞かれません」

N「では地獄ではどんな声が聞こえるのでしょうか」

D「源信和尚の『往生要集』に地獄では

年歳、啼哭の声を聞く

年歳とはいってもいつも、啼哭とは大声で泣き続けている声、それを聞かされるのが地獄だといわれ、阿鼻地獄では

所受の苦痛また間隙なし。ただ苦に逼められて号き叫ぶ

声を聞きて、衆生ありといふことを知る。

と説かれています。阿鼻地獄では、ひまなく受ける苦痛で号泣する声のみが聞こえていて姿は見えない。ただ大声で

泣き叫ぶ声によって真つ暗闇の中に衆生がいることが知れるとのことです」

N 「恐ろしいですね」

D 「ええ。その場所がどういう場所かはという声や音が聞こえてくるかで分かれるとも言えましょう」

N 「そうですね。紛争地の中東では爆撃の音や建物の崩れる音、泣き叫ぶ子供の声がTVで放映されますね。とても苦しみの多い場所だと感じます。また静かで鳥の声や川のせせらぎが聞こえ、美しい音楽、人々の談笑する声などが聞こえるなら、その地域が平和なところだと感じますね」

D 「この世界の中にもいろいろな音や声がありますね。ただしかし、どちらにしましてもこの世はあちこちで愁歎の声を聞かざるをえませんね。苦の世界ですね。このような世の中で、日々南無阿弥陀仏の大慈大悲のお声をお聞かせいただくのは有り難いですね」

(了)



お便り

T・S氏より

「木村無相師臨終法話」注記の続きです。

◎ ◎

四。『図らずも凡夫の心としては信じられぬ、タノメぬ、はからわぬができぬ、弥陀にまかせられぬまんに「極重悪人唯称仏」「称我名字」「ただ念仏して」善導大師の加減の文(若我成仏十方衆生下至十声若不生者不取正覚)のまんにまた念仏申すことにおいて、本願を信じ、たのみ、ハカライなく、弥陀にまかせるといふことになっているのであります。

我々としては絶対不可能なことが、ただよき人の仰せ、如来の勅命のまんにただ念仏申すということにおいて、はからずも成就されているのでした。．．．ただ念仏申す以外に本願を信じたり弥陀をタノミにしたりはからいなくマカセルというようなことは全然無用なことでした。我が生死の出離の道はただ念仏申すこと、それだけで十分なのでした。」(木村無相師の手紙)

☆私思う。弥陀の本願が我が機に懸けられていると、弥陀の願心に感応すれば、その弥陀の願心の不思議ゆえ弥陀の願心に感応道交する故に、ただ十念の念仏申すまんに本願を信じ頼みハカライなく弥陀にまかせることになっているたのです、なるなりになっていたのです。ここは仏智不思議というか、弥陀の願心の不思議としか言いようがありません。理屈では理解できません。ただ称えるまんに弥陀にまかせることになるのはひとえに弥陀の願心を絶対的に信じられるようになったからなのです。何故なら、そこに絶対無能のわが身のための本願であると領けたからであります。絶対無能のわが身の中からはただ称えよの弥陀の願心念仏が立ち上がりくださったとも云えるのでしょうか。ただ称えることが弥陀を信じはからわづたのむことになっているのは弥陀の本願力のなせるわざ、ひとえに弥陀の絶対的一人仕事としか言いようがないのでしよう。

信心とは私が起こす信心ではなく、弥陀の本願願心の真実が信じられた時を云うのであります。それ故に歎異抄第一条では「弥陀の本願には老

少善悪の人を選ばれず、ただ信心を要とすとすべし。その故は、罪悪深重煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にたまします。」と弥陀の本願願心つまり南無阿弥陀仏こそが私のための弥陀の願心であると領けたことなのです。私の心の信じ心ではありません。我が無能の悪性の煩惱の機に対して弥陀が懸けられた本願願心念仏なのです。ゆえに、我が無能のままでも悪性のままでも煩惱のままでも弥陀の願心に助けられるのです。

この我が悪性煩惱無能の機がなければ弥陀の本願願心念仏全て無駄ごととらごと誠なしです。私のこのどうにもならぬ機に懸けられた本願なのです。弥陀の本願に救われ助けられ生きることが信心を得

た姿なのです。我々に信心があるわけではありません。弥陀の本願が信じられたら、そのことがハカラワズ弥陀を頼み信じることになるのであります。我が煩惱無能悪性の機が弥陀の本願願心念仏を感じ取るのです、感応道交するので、信心を獲得させられるのです。ゆえに煩惱様、悪性様、ハカライ様、無能様、悲しみ様、絶望様なのです。しかしこの単純明快なことがなかなか自己の心に信じられるものでないことも事実なのです。ただ自己の宿業に本当に泣く者が、絶対的に助からぬと自己が領けたときしかこの世界に入れないのです。

(続く)

《二〇一六年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名——(敬称略)

青木宏克 赤股一夫 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 幾代禮四郎 石川紀美子
伊東清志 井上守 今村光志 岩谷龍 岩田能一 植田節美 小澤ちづ子 小畑住子
香川郁夫 加藤 忠 鹿野良子 萱島聖志 川端靖雄 窪ナル子 古賀智敏 児玉慶子
佐藤孝幸 下野誠二 下野知恵子 新保弘吉 寿賀晴剛 関有江 谷村往世 津田衛一郎 寺坂典子 土井令子 長井一江 中川政二 中野タカ子 中村千和男 中村暢明 中村穂積 中村ホミ子 中村幹夫 中村美登子 中山緑 七村文子 西塚祥子
野原佳子 長谷川満 泰京子 濱秀子 林久司 原崎佳水 福井靖弘 前田ふくの 増成和輝 町百合子 宮伊勢子 三宅真知子 宮野勲 宮野エイミ 宮野純孝 宮野道子 室塚良治 森野茂治 山下絹子 山下東洋栄 山下征洋 横田ミチ子 吉岡正人 吉田徳子 吉ノ菌睦枝 亮木与志

(総額二二〇〇〇〇円)
以上の皆様方より御懇志を賜りました。大谷派(東)本願寺の方に納めさせて戴きます。有難うございました。